

認知症患者と家族の孤立を防ぐために



さわやかクリニック
看護師 中嶋 緑
なかしま みどり

Bさん（80代女性）は夫と2人暮らしで、もともとはスポーツを楽しむ活発な人でした。急激にものを忘れが進み、同じ事を繰り返し発言するようになってきました。

身体症状があるにもかかわらず、本人が病院に行くことを拒否していました。近くに住んでいる息子さんが役場へ相談し、役場から当院へ往診依頼となりました。往診でお会いしたBさんは不安そうな表情で「痛いのは嫌い」「何

もしなくていい」と繰り返し、診察以外は拒否されました。採血も行えない、服薬もできるか不明なBさんに対し、何かいい方法がないか考えていました。医師やケアマネジャーの助言もあり、認知症患者医療センター（認知症に関する詳しい診断、相談などを行う専門の医療機関）に繋げるため、後日Bさんの息子さんに相談してみることにしました。

数日後、息子さんが来院された際に、センターへの受診を促しました。疲れ切った表情をされていたため面談すると、認知症介護の大変さ、今までどこに相談したら良いかわからなかったと話されました。

た。息子さんの精神的負担軽減のため、その後も面談の時間を作り、電話での連絡を行いました。息子さんの許可が得られ、Bさんは入院し治療を受けることができました。

認知症のある高齢者の場合、SOSを発信することが難しく適切な医療を受けることが困難になる場合があります。また相談する場所が分からず患者と家族が孤立する要因になっていると感じました。

今回は、役場、当院、センターの連携により、適切な医療に繋がられた事例になりました。今後も連携を図り、認知症患者と家族に寄り添った支援をしていきたいと思えます。